Notes of 'Sewaji'

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/5171

「世話字尽」展望

―延宝から享保まで―

古屋　彰

一

『和漢音釈書言字考節用集』(享保二年刊)は、ユフダチに当る文字として〈涼雨〉〈白雨〉〈暴雨〉〈晩立〉の四つを挙げている。このようにいくつかの文字を併記するに際して、書言字考では、由緒正しい文字を先にし通俗の文字を後に置く傾向が見てとれる。ユフダチの場合も、最後尾の〈晩立〉の文字に「俗字」なる注記が付されている。当時もっとも一般的であったと思われる〈夕立〉がなぜ見えないのかは今問わないとして、〈夕立〉や〈晩立〉、さらに『万葉集』に現れる〈暮立〉をも含めて、これらはユフダチの語構成に即応した文字あてと認められる。一方、はじめに置かれた〈涼雨〉の注には、

江東呼夏月暴雨為

と『爾雅註』が引用されており、またユフダチに先んずるムラサメでは〈白雨〉の出典注記として『白文集』『順和名』が示されているから、〈涼雨〉〈暴雨〉〈白雨〉のいずれもが漢語の日本語への引き当てと意識されていたとみて間違いない。

ユフダチに〈白雨〉の文字を当てることがどこまで溯り得るのか調査の手は行き届いていないが(節用集類では慶長二年刊の『易林本』に見える)、松永貞徳は『御傘』(慶長四年刊)の中で、

夕立　夏也。……白雨と書事は天満森（てんまもり）　由己（ゆうこ）法橋、山谷か詩にあると申されしかは、丸か執筆の時書始し文字なり。正字なれは夕の字・立の字に二句可嫌義なから、新式に其沙汰なけれは昔のことく三句可去也。惣別かやうの文字あたらしく見出したりとて懐帋・短冊にはかゝぬ事也。歌道不相伝の人珍しき文字をとりあつかふ物なり。古人のかゝれし哥書を御覧候へ。ほとゝきすなとにも郭公と云文字ならて子規共牡（ママ）鵑共不可有と中院入道殿丸に被仰聞侍し。尤殊勝の御教なり。

と述べている。[1] 清客堂児水は『常陸帯』（元録四年刊）にこの御傘の詞を引いてのち、

口伝云一文字すら余多読（アマタヨミ）有況異様（コトヤウ）の文字を書てかんななくんは其句意を失ひ句意に違（タガ）ふ事多かるへしと也

として、その後に意義分類体の字尽を付載している。常陸帯に序を寄せた寺田重徳は、この字尽の九九七語を「めつらしき態字（ワザ）」と呼んでいるが、この態字の中に〈白雨（イウダチ）〉が収められてある。とすれば、児水がこの字尽を編んだ意図は、書記するに際してこれら文字を駆使せんがためというよりも、書記されたものを間違いなく読みとるための知識を提供するところに重きがあったのではないか。

二

森岡　そうしますと、過去の漢字研究というのは、どうも外国語研究の色彩がつよい。しかし、現在われわれが使っている漢字というのは、すでに外国語ではなくて日本の文字になっている。『節用集』で「白雨」を「夕立」と読ませてるのは、外国風のスペルの日本語的な読み方にほかならないが、日本人は少なくとも明治以後そのような外国風のスペルを避ける方向をとって白雨をユフダチと意読するのじゃなしに、ことばを「夕」と「立」に分解して一字一字の漢字を意味に対応させるというふうに、漢字を国語と直接結びつけて使うというふうになっ

てきています。

山田　江戸時代風にいえば、「世話字」みたいなものですか。

森岡　いいえ、かっては「世話字」みたいなものが多かったわけですが、そういう用字法をやめる……。

山田　これは、中国で成立したものの日本での応用で、古典中国語的ではないけれどもやはりもともとは異国的のものです。私は、もしつけ加えてよいなら、日本風な文字連結の成立ということも考えておきたいのです。『和名抄』にある「俗云…」としてあるようなものの中で、万葉仮名でなく、表意的に二字を日本風に訓読させる字面の成立したことです。「丸雪」と書いて「あられ」と読むとか、そういうふうな類の世話字は字面とことばの姿が一致しませんが。

森岡　そう、字とことばが対応しない。『節用集』にも、世話字みたいなものが多いですね。そういうふうな用字法を排除して、明治以後はことばを分解して、一字一語というか、一字一意味というふうな形の使い方に切りかえていきましたね。

山田　切りかえたといえるかどうか……。

森岡　すくなくとも国語政策と国語教育の面ではしようとしてきましたね。

山田　ですから、あなたのことばを使うと、似たようなことをいえば、そういうものはいわば非常に世俗的なというか、通俗的なものだから、学校教育に入ってこない。そういう意味での整理はあったでしょうね。しかし、それ以前に、そういうものをとくに研究したものがあるかというと、それほどないですね。

森岡　そうですね。

右は、『日本語の文字〔シンポジウム〕日本語④』[2]からの引用である。「世話字風の漢語と分解式の漢語」の見出しが

付されたこの部分は世話字そのものを必ずしも論じているわけではないのだが、森岡健二・山田俊雄両氏の間に世話字に対する認識で微妙なずれがあるように思われる。ここでは、たまたま〈白雨〉と〈夕立〉とさらに〈丸雪〉がとりあげられている。〈丸雪〉は「字面とことばの姿が一致しない」点で〈白雨〉に通ずるが、「日本風な文字連結」である点では〈白雨〉と一線を画する。山田氏は、〈丸雪〉を「そういうふうな類の世話字」として認められ、どちらかといえば、〈夕立〉式の文字あての方に世話字の本体を見ておられるのではないか。

永井如瓶子の『邇言便蒙抄』(天和二年刊) 臍末の世話字尽には、

愚駑々々　瓦落々々　真味理　徒空念

といった、漢字一字一字が何らかの意味でことばの音構成と対応しているものが全体のほぼ八五%強を占め（その上でことばの意味や語感をも暗示し得るように配慮されたものが多い）、字面とことばの姿が一致しない

大語　私語　可笑　浮雲

の類は義読として世話字と別置されていること、義読とされるものの八割強が当時の節用集類に登録されているのに対して世話字の場合は五割弱にすぎないこと、などまえに報告した。[3] 邇言便蒙抄の臍巻では、〈暴雨〉と〈雪丸〉が義読として扱われていて世話字には出ない。

しかし、これが当時の世話字に対する意識の一般的姿を示しているかといえば、必ずしもそうではない。たとえば、『増補大和言葉』(延宝九年刊) の世話字尽に〈丸雪〉が見えるし、『世話用文章』(元録五年刊) 上巻に〈暴雨〉が出て、

暴雨　凍雨(ママ)とも白雨とも夕立とも書べし

と頭書されている。[4]

義読とはもともと与えられた文字の読みとり方に関する呼称であろう。〈私言〉なる文字によって表象される「ひそかにいう」といった義からサ、ヤクということばに到達する、そのよみが他ならぬ義読ではないのか。これに対して

世話字とは、もともと文字とは縁のうすい世話（口頭の俗語）にことさら当てた文字（漢字）を指しての謂であろう。世話字には、ことばの音構成にできるだけ即応した文字あて（それだけでなく語義や語感への配慮も一方にはあるのだが）がなされる場合もあれば、ことばの意義や語感を分析した結果を文字に表現する場合もあろうし、更には目新しい唐話を利用することもあったであろう（会意方式などによる新しい造字もないではない）。語義や語感を分析した結果を文字に表現したものは、その文字の読みとりにおいては義読式となる。唐話を利用したものの中にも、当然そのような類のものが含まれる。ただ、邇言便蒙抄で永井如瓶子が、

一雪丸（アラレ）　万葉（マンヨウ）に見えたりかやうの義（ギ）よみ……（臍本一ウ）

一大語（コハダカ）　……遊仙窟（ユウセンクツ）に見えたりかやうの義読（ギヨミ）……（臍末四オ）

と述べた文脈からは、義読には、気分として典拠をもちいくらか時代がかったものとする意識が働いていたように思われる。節用集との関連で、義読に比して世話字においてやや疎遠さが目立つことは先に触れた。それだけ世話字が当世風であったと言えるのでなかろうか。

当時の世話字意識を探るには、世話字尽の類をできるだけ広く見渡さねばならないのは当然であるが、広く見渡せば見渡すほどある種の混迷に陥るのも避けがたい。

延宝・天和の頃から世話字尽が行われはじめて、元禄期を頂点に宝永・享保あたりまで、世話字を集める営為には自ずと微妙な変化が見られるのではないか。そのあたりを見極めておかないと世話字は把えにくくなる。

三

(イ)　延宝八年刊『続無名抄』「世話字尽」　五九九語（三八語）　雑纂　混合　片仮名

(ロ) 延宝九年刊『増補大和言葉』「世話字尽」[5] 三四九語(四四語) 雑纂 言語中心 片仮名[6]

(ハ) 天和二年(二月)刊『邇言便蒙抄』「(世話字)」 二一六語(三一語) (雑纂[7]) 言語 片仮名

(ニ) 天和二年(一〇月)刊『和語対類(続集)』「世話字」 一四五語(〇語) 雑纂 言語中心 片仮名 原拠(イ)

右は、延宝・天和年間に刊行をみた世話字尽である(勿論、管見の及ぶ範囲である)。刊年・書名・世話字尽の名称・総語彙数(一字語の内数)・編纂形態・言語的語彙を中心とするか否か・仮名の種類・主たる原拠のそれぞれについて簡単に記した(以下、同じ)。

(イ)の著者一時軒惟中は談林派の俳人として知られているが、続無名抄はほぼその書名から察せられるとおりの内容であり、下巻は、目録によってこれを示せば、「万葉文字ぬき書」「百人一首人の名よみくせ」「同歌の清濁」「伊勢ものかたりのよみかた」「連歌詞のすみにごり」「源氏もの語の詞」「世俗の字づくし」のごとき内容である。従って、巻末の「世話字尽」も直接俳諧との関連を想定する必然性はなさそうである。(ロ)の増補大和言葉の本来の部分「大和言葉」はうたことばを扱っているが、これに「恋の詞付合」と「世話字尽」が加わったのが同時なのか否か、またそのことと幾種かの序とがどのようにかかわりあうのか。本書の性格はかならずしも明らかでない。(ハ)の著者永井如瓶子は『庭訓往来諺解大成』(元禄一五年刊)の著者として知られている。邇言便蒙抄の序を「幼学之士為於日用書翰之一助言爾」と結んでいるが、単に日用書翰に必要な文字を集めたといった性格のものではなく、首巻には「世間所用の文字」を、臍巻には「難字」を、足巻には「庶物の異名」を集め、その多くに「出所を論し各訓解を其下に添」えた類書であって、難字を扱った臍巻の末尾に世話字がいわば付録風に集められている。

続無名抄を皮切りに年を接して現れた右の三つの世話字尽は、それぞれの立場からの編者の関心下に集められたいわば草創期の世話字尽である。邇言便蒙抄の編者の嚢中に『字林拾葉』(延宝八年刊)や続無名抄があったことは確かと思われるが[8]、それでも、後に現れる、流行を追って先行の世話字尽に安易によりかかった類のものでは決してない。

言語関係の語彙を中心として語彙数もそれほど多くはなく、片仮名付訓の雑纂形態であるのも共通している。いみじくも、邇言便蒙抄において世話字が難字として扱われていることからもうかがえるように、知的興味に訴えてくる最も世話字らしい世話字が集成されている。一字語の含有率は一〇%前後にすぎず、一見しただけで節用集類の語彙とは異質である。

邇言便蒙抄と同年刊行の和語対類は、書名の示すとおり『対類』[9]に模して編集された和語の対類であり、「嗜ム二狂聯ヲ一者」が対句を成す時の用語集として意図されたものである。二字語を主体にその文字構成から、乾坤与乾坤・乾坤之連綿・乾坤之二物・乾坤与人倫・乾坤与気形・乾坤与支体・乾坤与態芸・乾坤与生植・乾坤与器財・乾坤与光彩・乾坤与数量・乾坤与方角・乾坤之三字・乾坤之四字といったぐあいに分類され、さらにその内部が平と仄とに分けられる。これらの語彙蒐集の資料となったものに、『新撰増補対類』（寛文三年刊）や字林拾葉にまじって続無名抄の世話字尽があることについては、別に書いた。[10]この狂聯用語集には世話字らしい文字が多数含まれており、事実後続の世話字尽の資料源として利用されてゆくのだが、実はこの本篇部分とは別に、付録ともいうべき続集の中に世話字尽(二)が収録されているのである。

和語対類続集は、まず一字の奇字類を集めている。末尾の二語を続無名抄の世話字尽から補ったのを除けばすべて字林拾葉から拾いとったもので、字形において特殊なものもないではないが、〈出〉〈初〉〈力〉などのように文字とことばの直接対応にいくぶんゆれのあるもの、言いかえれば漢字の原義からややずれた文字用法のものが目につく。この一字の奇字類につづいて世話字が収録されている。二字語のしかも言語関係語彙に限られ、

情断　油断　喫緊　塗炭　蓬奴　闘諭　不泳　尤豊　音々　混儲　能間

の一一語を除いてすべて続無名抄の世話字尽から拾い取られている。語彙蒐集の態度は安易と言えるが、単に流行を追ってのものではなく、狂聯のための用語集としての意図ははっきりしている。和語対類と一対をなす『眠寤集』は

「雙吟漢和千句」を収めるが、そこには和語対類本篇の語彙はもとより一字の奇字類や世話字中の語彙が散見する。

四

(ホ) 貞享三年刊『真草両点広益二行節用集』「増字尽世話詞」 一四八語(一三語) 雑纂 言語中心 平仮名 原拠(ロ)

(ヘ) 貞享五年刊『頭書増補節用集大全』「増難字尽」[11] 一七一語(一〇語) 雑纂 言語中心 平仮名 原拠(ホ)か

世話字は、そのことばとしての性格や文字としての社会的定着度から見て、節用集類(通俗辞書とはいいながら)にただちには反映しがたい側面をもつことはたしかである。しかし、そのような世話字に関心をもったりまた世話字を必要とする人たちによって世話字尽が編まれはじめると、やがてその動きが節用集などに反映しはじめる。貞享の(ホ)や(ヘ)は、まず付録として世話字尽をとり入れる。[12] (ホ)の真草両点広益二行節用集の世話字が増補大和言葉の世話字尽から拾い取られたものであろうことは、すでに報告した。[13] (ヘ)の頭書増補節用集大全の世話字も同一線上にある。[14] 付訓が平仮名となったことが、延宝・天和の世話字尽とやや異なる点である。

五

(ト) 元禄四年刊『不断重宝記大全』「万世話字尽」[15] 一〇六一語(四〇五語) 意義分類 混合 平仮名 原拠『字林拾葉』

(チ) 元禄五年刊『世話用文章』「世話字節用集」 八九三語(二九語) 意義分類 混合 平仮名 原拠『和語対類』[16]

(リ) 元禄六年刊『字尽重宝記綱目』「(言語并)世話」 一七四語(二語) イロハ分類 言語 平仮名 原拠『和語対

類』・(ホ)

(ヌ) 元禄八年刊『書札調法記』「世話難字(尽)」 九六三語(六〇語) 意義分類 混合 平仮名 原拠(チ)

(ル) 元禄九年刊『反故集』「諺字」 二七六八語(九〇七語) イロハ分類・意義分類 混合 片仮名

(ヲ) 元禄一二年九月刊『詩聯大成以呂波韻』「世話字」 一四六語(〇語) 雑纂 言語中心 片仮名 原拠(ニ)

(ワ) 元禄一二年九月筆『世話字考』[17] 一四八九語(二八五語) イロハ分類 混合 片仮名 原拠(イ)・『広益節用集』[18]

(リ)の編者洛東隠士とはいかなる人物の隠れ名か知らないが、[19] 字尽重宝記綱目は同じ版元平楽寺から先に刊行を見た字林拾葉をほぼ改編してなったものである。[20] そのイロハ各門末尾に(すべての門ではないが)、「世話」「世」「話」の小見出しの下に世話字が新に増補されている。貞享刊の二種の節用集において付録として世話字尽があったのに比して、ここでは本体部分にはっきりした形で世話字がとり入れられたことになる。ただ、その語彙は和語対類本篇の態芸之三字四字と同続集の世話字、および真草両点広益二行節用集の増字尽世話詞から拾いとったもののようである。(ヲ)の編者肖柏亭(清地以立)は、以呂波韻を主としてそれに詩賦聯句および俳聯のために必要な既成の書をとり込んだもので、巻末付録の世話字一四六語も冒頭の二語を除いて和語対類続集の世話字尽に拠ったことは明らかである。[21]

さて、元禄期の世話字尽で第一に注目されるのは、世話字が体系的に集めはじめられたことである。語彙数の増加、必ずしも言語に限らない語彙の蒐集、イロハ分類や意義分類による編纂の整備といったあい関連する現象によってそのように言い得るであろう。[22] 第二に、世話字のみを扱った書物の出現である。(チ)の編者艸田子(苗村常伯)は著述家というにふさわしい人物であるから、時流に乗っての企画と見られなくもない(この世話用文章下巻の世話字節用集が、同じく著述家と呼ぶにふさわしい中村平吾三近子によって、書札のための調法記(ヌ)にいくらかの改編の手を経てとり入れられたことも面白い)。これに対して、(ワ)は刊行されたものではない。編者遊園の「与愚息某甲」の言をそのまま信ずることはできないにしても、「二字三字ニテ面白ク作リ成タル世話字」を「一時軒惟中ノ考タル文字(続無名

抄)」や「広益節用集」に索め「且又ミツカラノ管見ヲ以テ記」したこの世話字尽は、多くの語に加えられた注記も含めてなかなかの労作である(片仮名が使用されていることも本書の性格を物語っている)。このような世話字のみを扱った書が世間に知られないところに存在したことの意味は大きい。第三に、書札のための世話字尽の出現である。世話用文章の上中の二巻は、世話字をふんだんに織り込んだ用文章であるけれども、これがただちに実用を目ざしたものとはとても思えない。しかし、書札調法記になれば、誰の目にも文字どおり書札のための調法記であろう。その第六巻に、世話用文章の世話字節用集にほぼ拠った「世話難字尽」(ヌ)が収められている。延宝以来の世話字尽の系譜を書札のための調法記中にとり込んだことが、新しい動きとして注目される。第四に、一字語の混入率の著しく高い世話字尽の出現である。(ル)では一字語が全体の三二・八%を占め、(ト)では実に三八・二%を占めている。反故集の天地の二巻は俳諧撰集であり、言水・又翁・如泉・芭蕉・西鶴などの名が見え、それらにまじって珍著堂・遊林の編者自身の名も見える。それらの中には漢句もまじり、とりわけ幸佐・又玄と編者との「漢和三吟」や又翁と編者との「和漢両吟」などの存在は、人冊の諺字が俳聯のためのものであったことを如実に物語っている。二字語を基本に狂聯のための用語を集めた和語対類にも、その続集に一字の奇字類が意義分類されて収められていた。諺語中の一字語の左傍にその漢字の字音を付した一類が、すべて和語対類続集の奇字類に見えることはすでに報告した。[23] 反故集の一字語はこの線で理解されよう。不断重宝記大全・万民調宝記の万世話字尽は、もとはといえば既成の書『浮世鏡』(貞享五年刊)からとり込まれたもののようであるが、[24] このように異なる書肆の手になる重宝記類に収められているということは、それだけ実用性が認識されてのことであろう。この世話字尽が、節用集の一本である字林拾葉から語を拾い取って成ったことは、別に書いた。[25] 浮世鏡を見ることのできない私にとって、浮世鏡においてすでに「万世話字尽」の名が冠せられていたのか否かを確かめる術はないが、もしはじめから世話字を集めるという意識でこの字尽が成ったのだとすれば、節用集の一本に拠っただけの世話字尽の出現として、この時期として異例である。すくなくとも、

一古来の節用集に間世話字を載るといへども一門に一字二字に過すよつて此下巻に備に世話字のせて諸人に便すすでに節用集に出たる字は省て不載之（世話用文章下巻世話字節用集凡例）

といった、この期の世話字尽一般のたてまえと大きくくいちがうことになる。

六

(カ) 宝永三年頃刊『改正増字万世節用集広益大成』「世話難字尽」　二八九語（四語）　イロハ分類　混合　平仮名　原拠(ヌ)[26]

(ヨ) 宝永五年刊『大魁節用悉皆不求人』「世話字合類大成」　二四〇三語（七五九語）　意義分類・イロハ分類　混合　平仮名　原拠(ル)

(タ) 享保一四年刊『寿海節用万世字典』「世話字つくし」　一四一語（四語）　雑纂　言語中心　平仮名

(レ) 享保一五年刊『一代書用』「書面走廻用字[27]」　三五六六語（一三九一語）　意義分類（「言語の部」イロハ分類）　混合　平仮名　原拠『字尽重宝記綱目』

(ソ) 享保一七年刊『筆海俗字指南車』「書状遣（世話）字」　一四〇四語（三八二語[28]）　（雑纂）　言語　平仮名　原拠『字尽重宝記綱目』他

(ツ) 享保一八年刊『悉皆世話字彙墨宝』「世（話字）」　三九〇七語（一三八九語）　（イロハ分類）　言語　平仮名

元禄期に多様化をみせた世話字尽も、宝永以後は目立った動きがない。(カ)(ヨ)(タ)は、いずれも節用集の付録としての世話字尽である。(カ)は世話字を書札調法記に索め、(タ)も同一線上にある。ともに語彙数が少く、(タ)はさらに言語中心に語をしぼっているために、貞享の二種の節用集に一段と近い。(ヨ)は節用集の付録としては語彙数が多い。これは節

用集の頭書の埋め草として、もともと語彙数の多い反故集に拠ったためと思われる。その際、イロハ分類・意義分類の形態から意義分類・イロハ分類に改編の手が加えられている。

残る(レ)(ソ)(ツ)は、ともに中村三近子によって編まれたものである。一代書用は用文章、筆海俗字指南車は語彙集型往来であるが、(レ)も(ソ)も書面・書状のための世話字尽である点で、同じ編者の手になる元禄期の書札調法記に連なる。また、(レ)は字尽重宝記綱目を原拠としており、[29] 節用集の一本から語を拾いとった世話字尽である点で元禄期の不断重宝記大全のそれに連なる。一字語の混入率が三九・〇%の高さを示すのも、そのためであろう。語彙集型往来の筆海俗字指南車は、まず言語的語彙を「書状遣字」として載せ、これを目録では「書状つかひ世話字」と呼んでいる。この(ソ)は、冒頭の〈鱠京〉から〈晩蒔〉に至る一一〇語を除いて、ほぼ字尽重宝記綱目に拠って語を拾っている。主として字尽重宝記綱目に拠って語を拾った部分では、ことさらにイロハ順を乱した感が否めないが(後に触れる)、一つには語を引きみる辞書としてよりも読み進みながらことばや文字に親しむという往来物としての本書の性格にもよるのであろう。一字語の混入率が二七・二%と高いのは辞書に拠ったためであろうが、(レ)の言語部の四六・六%に比べるとかなり低くなっている。字尽重宝記綱目に

とあるものを

とあるのを

として取り入れる傾向のあるためで、これ又往来物としての本書の性格によるものである。これは、一字語の場合に限らない。

一途憶詰　逸興千万　許印可　異風人

と、より日常のことばに即した形で示そうとしているのである。

悉皆世話字彙墨宝は、名はともかくも実体はほとんど節用集そのものである。その名称からすれば、本書に収められた語彙全体を編者中村三近子は世話字として扱っているようでもあるが、門立が

天・神・時・官・人・名・衣・食・器・支・魚・貝・鳥・畜・虫・草・数・世・漢

となっていて、その中に「世」が見える。門立がやや細かく、言語関係語彙を「世」と「漢」に分けたところに従来の節用集と異なる面を見るが、中村三近子においても世話字の中心が言語的語彙にあると意識されていたのであろう。筆海俗字指南車の例もあるので、悉皆世話字彙墨宝の中の「世」の語彙のみを世話字として扱うことにする。「世」は「十九門部分註」に

此下には俗間の人つねにいひあつかふほどの文字ことぐくあり

とある。イロハ各部のそれぞれの「世」の門冒頭にことわざ・成語の類が集められているのが特徴で、例えば「い」部の「世」の冒頭には

依稀写　含霊　野猪武者　伊勢日向話　石言俗　抱石投渕　命宝宝　急速廻　犬耄　見軍矧矢　井蛙不知大海
磨芸　鰯頭信心柄　探無痛腹　疼上針　愛子為旅　居抜腰　陰徳陽報　否応返事

の語が並び、それにつづく〈一廉〉〈異相〉以下は普通の節用集の語彙と異ならない。このことわざ・成語の類が何に拠ってとられたものかまだ調べはついていないが、『諺草』(貝原好古、元禄年中刊)の「諺」と「俗語」の中に〈含霊〉〈疼上針〉〈愛子為旅〉〈居抜腰〉を除いて現れるので、いずれその前後の同類の書に拠るものと推測される。

七

以上、管見の及ぶ範囲で、延宝から享保にいたる世話字尽の概観を試みたのであるが、その流れにはやはり大きな変化が見受けられる。

世話字は、世話に当てた文字である。しかし、特に世話字と称して、ある種のことば或は文字に人々の目が向いたのは、もともと文字の当たらないようなことばにことさら当てた文字の奇異な面白さによるのであろう。つまり、ことばとしてあまりに通俗な世話であるという条件と、そのためにことさらに当てた文字が普通のことばと文字との対応をはるかにはみ出しているという条件とをあわせもった世話らしいことばの世話字らしい文字として、当初人々の関心をひいたにちがいない。その種の文字はただちには節用集類に反映しにくい側面をもつから、辞書編纂とはいくらか異なる営為として世話字尽が登場してくることになる。

俳諧には俗語がとり入れられるから、俳諧師たちの世話字への関心は頷ける。時として自らも使い、また書記されたものを読みとらねばならぬ場面も多くあったであろう。これが俳諧和漢聯句の漢句ともなれば、世話字は必然となる。反故集の天地の二巻は俳諧撰集であり、そこに俳聯も収められていることは先に述べた。いまこの撰集中、特に振仮名付きの語彙でしかも人冊の諺字に登録されているものを拾い出してみると、次のとおりである（まず人冊の諺字を示し、その下に句を掲げる。多少の異同ある場合も拾った）。

童奴（ワッハ）　夕霞牛にひかるゝ童奴（ワッハ）哉（天七オ）
交尾（ツルム）　花と散車となりつ交尾（ツルム）蝶（八ウ）
全敷（モトカシ）・鉄漿（カネ）多識　全輪敷（モトカシ）や日鉄漿（カネ）のしらむ花の雨（九ウ）
颯雨（ザブリ）　雨の颯降（ザブリ）に踊やふれつ（一一ウ）

捏首（ネチムク）
黙諾（ウナツク）
颰・颰込（ユスル・ユリコム）
行域（ハシリゴクラ）梵網
罔両（カゲボシ）
擬宝珠（ギホウシ）
寛（クツロク）
闌（ヒネ）
熟（モドク）
戻脚（ワニアシ）
生易（フガハリ）鳥ノ——
仮臥（ウタネ）
発飽果（ホツトアキハテル）
覗（ノゾク）
幹文選（イケタ）
丁々（ボトボト）
童奴（ワツハ）
井投物井（ドンブリ）中音
蕓（スギナ）

捏首（ネチムケ）は囲碁を忘れて捨小舟（一一ウ）
黙諾（ウナツク）か夕飯過のかきつはた（一六オ）
ゆら〳〵と鐘に気を颰蓮（ユル）哉（一七ウ）
白——雨ハ人ノ行（ハシリコグラ）——域（一七ウ）
罔両（カゲボシ）の消る所を涼みかな（一八オ）
擬法珠（キハウシュ）や尻すえられぬ夕涼み（一八ウ）
稲背長世の寛（クツロキ）を穂に見せて（二一オ）
月闌（ヒネ）て後の詠や源内侍（二三ウ）
新湯（アラ）いむ人の心よ鰒熟（フクモドキ）（二七ウ）
はつかしや戻脚（ワニアシ）見する霜の橋（三〇オ）
青柳動（ユス）る生（フ）かはりの禽（地一オ）
上童旅の霞に仮寝（ウタネ）て（一オ）
牛——市　発（ホツト）　牛——鼻（シ）（一ウ）
鼠——窯（アナ）　覗（ノゾイテ）　鼠——尋（ル）（一ウ）
幹（キノケタ）の崩れ芭蕉葉の陰（一ウ）
丁（ボトボト）——々　虚（ウツ）——寂（サビシキハ）　碪（一ウ）
山陰に柴刈童奴（ワツハ）鹿に似て（五オ）
月——光　池——水（ニ）　井（ドンブリ）（七オ）
信夫なる石も蕓（スギナ）のみたれ哉（九オ）

肩組馬（カタクマ）
肩組馬に二人散折桜哉（九ウ）

佽強（スネル）
佽強て見つ笑ひもせしに年の暮（一一オ）

音内（エヘン）
音｜内　槿（ノ）開｜尅（トキ）（一一ウ）

株（カブ）
ひね木の株（カブ）に名は若楓（一二オ）

煙筒（キセル）
借（ルニ）心｜安（ハ）焌（キセリ）｜筒（一二オ）

挈（ヒキツル）
遷｜宮（ニ）挈（ヒキツルハ）恋（ノ）｜襇（モスソ）（一二ウ）

閉健（シコル）
有（スハ）二余｜力（一）閉（シコル）弓（ヲ）（一三オ）

封疆（ドテ）
収（ルハ）水｜道（ヲ）一封（ド）疆（テ）（一六ウ）

忠（マメヤカ）
忠（マメヤカニ）御（ミサキヲフ）呵　蛍｜狩（一七オ）

新曲（イマヨウ）
爽（サハヤカニ）新（イマヨウス）曲　月｜望（ミ）（一七オ）

鼈（ノノスマ）
月の朧に化る鼈（ノノスマ）（一九オ）

右の語彙の中には、今日の我々の目から見て全うなことばやなんの変てつもない文字もいくらかまじっている。反故集が延宝・天和頃の世話字尽に比して体系的に世話字を集めようとしたために、世話らしいことばの世話字らしい文字がやや拡散された感は否めない。それでも俳諧・俳聯に使用されることばを網羅的に集めようとしたものではないから、おのずとある限度内にはとどまっている。

ところが、書翰・書札のための世話字尽では、これと異なる動きを示しているように思われる。

邇言便蒙抄の編者永井如瓶子が、自序を「幼学之士為於日用書翰文一助言爾」と結んでいることは先に紹介したが、これは一種の常套的謙辞に近いものであって、日用書翰の字尽的なものとして編まれたものでは決してない。この編者によって義読と世話字が区別されてあることもまた先に触れたが、世話字は本書に収めるには必ずしもふさわしい語彙ではなく、難字を扱った臍巻の巻末に一つの知識提供として付録的に収められているのである。[30]

元禄期の世話用文章は、その上中二巻が用文章形式をとっているとは言え、これが実用的な書翰文範であろうとは誰の目にも映らないであろう。これに対して、書札調法記は文字どおり書翰・書札のための調法記として編まれている。本書は六巻からなる。第一巻から第五巻までの内容紹介は割愛するとして、第六巻は凡例に

一六巻には書状世話字高下の大概をしるし万物の異名門々をたてゝこれをしめし又世話難字づくし并書舁のごとき同訓にして意旨のたがふ文字を粗つらねて巻末どするのみ

とある。これが、第六巻冒頭の目録では

一、書状言葉字替字高下
二、万物異名之部
三、世話難字尽
四、同訓にて心ちがふ文字

となる(振仮名および細目は省略)。第一の書状言葉替字高下は、

貴人江之分
〔家内〕御家門　御一家　貴宅　尊家　〔無事〕御機嫌能　御安体　御安全　御堅達　御勇健　御剛健（以下略）

同輩江之分
〔無事〕御堅固御座候也　御息災之由（以下略）
下輩江之分
〔家内〕其元一家　其地家内　〔堅固〕御無事　御息災　御無為　無二異義一　異変無レ之　相替事無レ之　不二相替一（以下略）

のように、書状用語の身分の上下による使い分けを示したもので、凡例ではこれらを書状世話字と呼んでいる。第三の世話難字尽は世話用文章の世話字尽を原拠としてとり込んだもので特に世話難字と呼んで区別しているが、この編者にとって世話字はかなり拡大されて認識されているもののようである。

この書札調法記には編者の名が記されてはいない。が、本書の元文五年版・明和四年版の奥には「中村平吾三近子述作書目」が載せてあって、[31] 中村三近子が編者であることを思わせる。国書総目録において編者を中村三近子としているのもそのためであろう。書札調法記第六巻の世話難字尽は世話用文章下巻の世話字節用集を原拠とするもののようであるが、たとえば言語門冒頭の二字語の一群をみると、門名の下の

砕々　辨口　万希　脂茶　柔従　空気　尤赤

の一行（七語）を除いて世話字節用集の言語門冒頭の二字語の一群（第一四丁表裏）をほぼ逆順にしてとり込んでいる。このやり口は、一代書用の書面走廻用字や筆海俗字指南車の書状つかひ世話字における中村三近子のそれと同じであって、この点からも書札調法記の編者を中村三近子と見ることができよう。いま一つ、世話字をきわめて広く認識しているらしいことも、編者を三近子かと思わせる。

さて、書札調法記の編者が中村三近子であるとすると、書札のための調法記に世話難字尽をとり入れた三近子が、その後書札のための字尽においてこれら世話難字の類をむしろ否定するような動きに出ることが注目される。三近子

は一代書用の書面走廻用字のはじめに、

節用集或世上にあらゆる所の字書等にいろ〳〵さま〳〵の文字のこる所なく極つくして何に事を欠ことなくそなはれり今こゝに輯むる所の用字は節用字尽のもやうと違ひ毎日書面入用の手近き文字をあつめて今日仰書又は手紙等の急用にそなふそれゆへ蟄居童辷追鼓南風北風などいへる難字何千字も字書にあげをくといへ共此等の文字は凡人間一代の内一度も用ゆる字にあらずかるがゆへに此所には箇様の難字は一字ものせず少々難字類は本文の文言の手爾葉に入置て児女の見ならいにそなふ又用字の内にいたりて近かき殿様内外候又一十百千万無事貴様目出度上下などいへる字数百字ありといへ共今日かな本にても用文章をみる程の人右の類の近き字一代に一度も引みる事なくみな覚え居ことなればこれ又一字ものせ置ず予一代書用と四民往来の文書同時に筆作し児童書面の為に通用ばかりの世話文字をのせて手習のたよりとす

と書きつけている。これは一種の節用集批判と受けとれるが、三近子が書面走廻用字において実際に試みたところは、節用集と全く異質の字尽を作成することではなくて、節用集の一本である字尽重宝記綱目の語彙の中から「凡人間一代の内一度も用ゆる字にあら」ざる難字と「一代に一度も引みる事な」い平易な文字とを削り落とす作業であった。人間一代の内一度も用いることのない難字の例として挙げられた五語は、奇しくもイロハ順に並んでおり、山田俊雄氏の御指摘のとおり字尽重宝記自体の中から拾い出したものである。[32] この五語の中〈追鼓〉と〈爽〉が字尽重宝記綱目に世話字として載せているものであり、〈辷〉はいわゆる国字（和製漢字）であり、残る二語も世話字尽にしばしば現れる世話字らしい世話字である。

「児童書面の為に通用ばかりの世話文字をのせて手習のたよりとす」と結んだ三近子にとって、書面走廻用字にのせた語はすべて世話字であり、しかも「児童書面の為に通用ばかりの」世話字であった。難字の類が切り拾てられたのは、世話字でないとしてではなく、「児童書面の為に通用ばかりの」文字でないとの判断からであろう。[33] 平易な文字

が削り落されたのは、「児童書面の為に通用ばかりの世話文字」の範囲をはみ出すからではなくて、字尽にわざわざ載せる必要がないと判断したからである。三近子にとっては、児童が書面に用いることばはことばとしてすべてが世話であり、それに当てられた文字はとりもなおさず世話字であった。書面走廻用字における選択は、世話字としてのそれではなく、有用度からくるものであった。中村三近子の世話字認識は、きわめて広い。

九

一代書用は書翰文範を本体として、頭書中に書面走廻用字が置かれていた。同じ三近子の手になる筆海俗字指南車では、字尽が本体としてあって頭書に書翰文範が置かれている。この字尽は分類体をとっており、はじめに書状遣字（目録では「書状つかひ世話字」）として言語関係語彙が集めてある。いま、この部内をかりに次の五三の部分にわけてみる。

	一	二	三	b	c	d
	鱠京	治定	頓作	平壊	世褒貶	二半
（自）						
（至）	晩蒔	実面	得脱	押圧	投	北
語数	110	30	47	13	27	17

四				五	
e	f	g		a	b
果敢取	露顕	色光沢	一朝一夕	嵩高	和薬者
時行	囉斎	一旦	畠地無	挍割物	和睦
76	2	75	6	93	22

					七							六					
f	e	d	c	b	a	g	f	e	d	c	b	a	g	f	e	d	c
御を	瘞うづむ	屈くつ	上うわ	箆の	癖く	汚よごるる	丹たん	練れん	望そらめづかい	徒つ	宿ね	有なだむ	丈ちやう	臨時間りんじのひまづいへ	滑ぬめ	流るる	御お
紕へ							扇ぜん	磨まの		空く							妙めう
子こ		度なく	風て	太ぶとい	愛せ		風ふう	功こう	視い	々づく	腐くさる		間ま	損へ	々ぬめ	布ふ	講かう
御お	方う	窕くつろぐ	倦うみ	和の	苦ぐ	余よ	大たい	憐れん	続ぞく	軽けい	租ね	難なん	打ちやう	流りう	抽ぬきんで		夥をびただし
正ま	た		退たい	ど	蓮れん						ん			涕てい			
面むき	見て		屈くつ	融か	転くへす	勢せい	魁くはい	惑まん	々ぞく	薄はく	税ぐ	問もん	擲ちやく	焦こがれ			
2	9	3	13	14	45	12	55	6	36	43	18	26	17	9	6	1	38

						十						九	八				
g	f	e	d	c	b	a	f	e	d	c	b	a		j	i	h	g
周あはて	颯さつ	義ぎ	猶ゆう	批めくる	妄みだり	私し	優やさし	搏まろめる	畦けい	節ふし	虚こ	手て	腕うで	狼らう	程ほど	無むつ	績うむ
	破は	強ごわな				我がが				椹くれ		場ば					
章る	理り	人ひと	予よ			見みゆる				立だつ	妄もう	賢しこい	強こき	籍ぜき	畾らい	屈くり	
無あちきな	催さい	気き	優ゆう	明めい	漲みなぎる	治ち	傭やとふ	設まふけ	翹ぎやう	不ふ	骨こう	的てき		老らう		無むぎ	羨うらやむ
									々ぎやう	都つ						義ぎ	
端し	促そく	随ずい	長ちやう	際さい		定ちやう			敷し	合がふ	幹がら	白はく		耄もう		道だう 者もの	
34	23	21	14	15	18	74	12	26	55	61	43	27	1	2	1	13	13

		十一 a
c	b	a
抬	世流布	腹疎
拏	世智弁	生理
17	12	24

e	d
酸事	挽擺
彩色	磷
7	20

右の中、冒頭一の一一〇語と四・七d・七f・七i・八の小部分を除いて、三・五・六・七・九・十・二・十一の順に、さらにそれぞれの内部を逆順にたどることによってイロハ順が顕在化する。このイロハ順に戻せる部分の語彙の多くは、一代書用と同じく字尽重宝記綱目に拠ってとり込まれたとみられる。その際、一代書用の書面走廻用字の場合と異なって、日常ことばの表現により即した形に改めてとり入れる傾向が認められることについては、すでに言及した。右の表のイロハ順の構造を見やすくする意味も込めて、右の表でとりあげた語の範囲内でその異同を示せば、

	字尽重宝記綱目	筆海俗字指南車
三 b	圧	押圧
三 c	褒貶	世褒貶
六 c	（追従軽薄也）	（軽薄）
七 c	倦	倦退屈

九 d	翹々
十 a	（治定）
十一 a	疎

翹々敷	
（治定）	
腹疎	

となる。

このように一代書用の書面走廻用字に比して筆海俗字指南車の書状遣字の方にやや往来物的色調が強いとは言え、書面・書状のための字尽であること、字尽重宝記綱目を原拠として語をとり込んでいることにおいては、両者は共通

している。そこで、字尽重宝記綱目の言語部にあって特に世話字として増補された語彙群が、この両者にどのように反映しているかを見ておきたい。まず、字尽重宝記綱目の言語部の世話字一七四語から一代書用の書面走廻用字にとり込まれた語彙を挙げると（書面走廻用字によって挙げ、文字及び訓に異同のある場合は字尽重宝記綱目の方を括弧中に示す。清濁を含めてかなづかいの違いは無視する）、

果敢（不果敢行）　塗炭　穏婆　千段（千切）　押柄（押柄者）　上風　愚駑（愚駑附）　癖（癖悪）　吹聴（晩聴）　後燕（後宴）　色弗　尻凝　怕　混々　節臘（節臘敷）　先繰（先繰々々）　僵直　素戻　赤手曳（赤手引）　裔頒（下配）

の二〇語があり、[34] 撰択率は一一・五％の低さである。つぎに、筆海俗字指南車の書状遣字にとり込まれた語彙を挙げると（比較し易くするためにイロハ順に改める）、

果敢取（不果敢行）　発才　身踏込（狭入）　惘然　頓軽者（頓飄者）　調茶（茶調）　御妙講（御命日講）　押柄者　御旱衣（御卑衣）　和薬者（倭厄者）　爽　嵩高（嵩有）　眼膜者（眼膜）　丹扇風（丹前風）　続々　徒空々々（徒空念）　宿腐　寝徒（寝徒者）　無屈（無屈理）　上風　箆太（箆太箭）　癖愛（癖悪）　節榑立　吹聴（晩聴）　手場賢（手場賢）　周章（周章騒）　阿房（阿房敷）　颯破理　義強人（義強）　蓬返（蓬奴）　仰々敷（仰々敷）　私我見（私我）　尻凝　邪々踏　無差異（無差異）　火疾事　閃々（閃々）　忆（怕）　裔配（下配）　素手引（赤手引）

の四〇語があり、[35] 選択率は二三・〇％である。後者において、二倍の世話字がとられている。しかし、これとても決して高い選択率とは言えない。ただ、両者に共通してとられた世話字が九語にすぎないこと、また前者においてこのような難字は載せないとして引合いに出された〈爽〉の語が後者にとられていることをいちおうここで注意しておきたい。

字尽重宝記綱目の世話字は、直接には『和語対類』の「態芸之三字四字」「世話字」や『真草両点広益二行節用集』の「増字尽世話詞」に拠ってとられているようであるが、さらに溯れば続無名抄と増補大和言葉に行きつくのである。

世話らしいことばの世話字らしい文字を集めた延宝の両世話字尽の語彙は、日常の書面・書状をしたためるに際してはたしてどの程度に役立つであろうか。

中村三近子は、一代書用の頭書中に

○此書本文の内にいろいろ六ヶ敷き遠き字難字を入れをくは童蒙手習の助にするばかり也平生の書面に六ヶしき字を書べからず用事の為にならざるのみならず無礼なりたとへば橄欖塗を文章に書にかな付なければ先つかはしても読がたしちやんとかなにて書べし覚て居は重宝にも成べし（九ウ）

と書きつけている。〈橄欖塗〉のような難字はふり仮名がなければ通用し難いし無礼でもあるとして遠ざけながら、「覚て居は重宝にも成べし」とも言っている。ここには、難字とだけある。しかし、悉皆世話字彙墨宝の頭書中の用文章不漏門の一つに「答世話字」と題する一文[36]があって、〈橄欖塗〉〈火朽〉〈鵤〉〈鑼〉の四世話字に関する問合せに対して同じ趣旨の回答をなしているから、世話難字と解してよさそうである。三近子が書面に使用することを堅く戒めた世話難字も、世間には媚て使う人もありがちなので「覚て居は重宝にも成べし」ということになるのであろう。筆海俗字指南車の書状遣字の中に世話難字〈爽〉が出ることは先に注意したが、右の四語の中〈火朽〉が諸器に〈鵤〉が鳥類に現れ、また〈橄欖〉が樹竹に現れる。一代書用の書面走廻用字には〈鵤〉のみが収められている。こうしてみると、同じ三近子の手になる書面・書状のための字尽とは言っても、世話難字を敬遠することが筆海俗字指南車においてややゆるいように見受けられる。それだけ、一代書用の書面走廻用字は、「児童書面の為に通用ばかりの世話文字」を集めることに徹底していると言ってよいのであろう。

ともあれ、書面・書状のために要用の文字を節用集から拾いとりそれらをひっくるめて世話字と呼ぶとすれば、さらに又漸く節用集類にとり込まれるにいたった世話難字風なものを「用事の為にならざるのみならず無礼なり」として省く態度を徹底させれば、初期の世話字尽との間に大きな逕庭を生ずるのは自ら明らかなことである。

十

もともと文字の当らないようなことばにことさら当てられた当世風な文字が世話字と称されて一部の人の関心を呼び、任意に拾い集められて世話字尽となる。続無名抄の世話字尽は約六〇〇語を収めるが、最初のものとしてはよく集めていると思われる。もちろんそこには漏れたものもあり人によっては省かれる文字も少くはなかろう。しかしこの種の文字はどしどし増益されるはずのものでもないから、延宝から元禄にかけて、いわゆる世話字らしい世話字を蒐集する営みはいちおう達成したと見てよかろう。それが一方で、意義分類やイロハ分けによって形を整えようとされたり、ある目的に沿って必要な語を広く集めようとされたりすると、語数も一〇〇〇語を超えさらには二〇〇〇語を超えることにもなってくる。それだけの語を求めるとすれば、単に気付の範囲の増補では追い付かなくていきおい辞書類に頼らざるを得なくなる。それにともなって一字語の混入率が増大し、時には漢語の類までが大きく混入してくることになる。世話字尽の変貌が人の世話字に対する意識を徐々に変化させ、変化した意識によってさらに世話字尽が変貌する。

世話字意識の拡散は、とりわけ中村三近子において顕著であるように見受けられる。それがきわめて個人的な事柄に属するのか、それとも時代の動きに沿うものであるのか、はっきりとした見極めはまだついていない。

注

（1）尾形仂・小林祥次郎共編『近世前期歳時記十三種本文集成並びに総合索引』（勉誠社、昭56・12）に拠って引用。

（2）学生社、昭50・3刊。

（3）「世話字―『通言便蒙抄』を手がかりにその糸口をさぐる―」（金沢大学法文学部論集文学篇24、昭52・3）

（4）世話用文章の上中二巻は意図的に世話字を盛り込んだ用文章で、特に頭書の対象となった語は編者にとって世話字と認識されてい

たもののようである。

(5) 「延宝九年辛酉正月吉日／高辻通雁金町永原屋中村孫兵衛板」の刊記をもつ本に拠る。「延宝九辛酉八月中旬松会開板」の刊記をもつ本や「延宝九辛酉通油町山本小兵衛板」の刊記をもつ本では、「世話字撰集」となっている。

(6) 右に同じ。後者では、付訓は平仮名である。

(7) 邇言便蒙抄自体は意義分類されており、世話字は難字を扱った臍巻の言語門中に収められている。その「世話字」の内部がイロハ分類などなされていないという意味で括弧付で雑纂とした。以下、これに準ずる。

(8) 注(3)の拙稿参照。

(9) 初刊は寛永二〇年の『新撰対類』と見られ、その後寛文三年(『新撰増補対類』)と貞享二年(『広益増補対類』)の二度にわたって増補改訂の手が加えられた。これらの版種、および和語対類との関係の概略は、「節用集と世話字尽―『字林拾葉』の受容をとおして―」(山田忠雄編『国語史学の為に』未刊)の補注に書いた。

(10) 同右拙稿。

(11) 本節用集の貞享二年版には「増難字尽」は付されていないが、貞享三年版・同四年版については未確認。

(12) 『真草両点広益二行節用集』本篇の増益部分にも世話字風な文字が目につく。これらについては、(7)『世話字考』の原拠とからめて別に書くつもりでいる。

(13) 「世話字尽と節用集―一つの改編の例をとおして―」(金沢大学法文学部論集文学編25、昭53・2)

(14) 同右論文において、元禄四年頃刊と思われる『頭書増補節用集大全』の「増難字尽」に言及した(その後山田忠雄氏の御教示によって、元禄七年刊行の末尾を欠如した本であることが判明)。その本の増難字尽では、貞享五年版に存在した

者為(なんぞ)　自奚(いづれよりぞ)　科云(くわをいふ)
粗毛立(ほけだつ)　喘咽声(しわがれごえ)

の二行分(五語)が脱落しているので、ここに付記する。

(15) 異なる書肆によって翌元禄五年刊行をみた『万民調宝記』にも同内容の「万世話字尽」が収められている。

(16) 世話字尽のみでなく他をも含めた『和語対類』全体を意味する。原拠を示すに際して、世話字尽のみを対象とする場合にイロハの記号だけを用いたのに対する。以下同じ。

(17) 東京大学文学部国語学研究室蔵。本書全体が世話字尽であり、書名がそのまま世話字尽名でもある。

(18) 跋文に拠る。いずれの一本であるかの特定はできていない。

(19) ちなみに、今井似閑『万葉緯』(黒川本)の冒頭に「洛東隠士編輯」とあり(『国文注釈全書』の翻刻に拠る)、元禄一二年および享保四年刊の『広益三重韻』の跋文の末尾に「洛東隠士拝書」と見えている。

(20) 注(13)の拙稿参照。

(21) 『詩聯大成以呂波韻』には『広益増補対類』と並んで『和語対類』本篇もとり込まれており、「世話字」の前に位置する「和語奇字類」もまた和語対類続集の「奇字類」をとり込んだものである。『世話字考』の跋文に「此外一字ニテ世話ニ近キ訓アル文字ハ以呂波韻等ニ多ク載タレハ爰ニ煩ハシクセス……」とあるのはこれを指すのであろう。

(22) (ト)『不断重宝記大全』の「万世話字尽」が意義分類されているのなどは、その原拠となった『字林拾葉』の影響とも見られるが。

(23) 「『反故集』の諺字—『斉東俗談』とのかかわり—」(金沢大学法文学部論集文学篇27、昭55・3)

(24) 佐藤鶴吉「片言直し」(方言4巻7号、昭9・7)

(25) 注(9)拙稿。

(26) 末尾の〈疎籠〉〈下配〉〈僵直〉〈推乱離〉の四語のみは、余白をうめるために『字尽重宝記綱目』の「世話字」から拾ったものと思われる。

(27) 「書面走廻用字」のまえがきに「……児童書面の為に通用ばかりの世話文字をのせて手習のたよりとす」とある。

(28) 『筆海俗字指南車』のみ原本も影印も目にすることができなかったので、『教科書大系第七巻』(講談社、昭47・1)所載の翻刻に拠った。総語数および一字語を数えるに当って、

移。染色の鈍色。→移染色の。鈍色。
岐行。虫匍匐。→岐行虫。匍匐。
流涕。焦。→流涕焦。
根情。骨。→根情骨。

など一部翻刻に従わなかった箇所がある。

(29) 山田俊雄「節用集改編ものの一例についてその一」(成城文芸73、昭50・4)参照。

(30) 邇言便蒙抄では、具体的な語を代表としてとりあげてその後に関連語を列挙するのが一般的姿であり、世話字の示し方が本書における唯一の異例である。

(31) 『近世文学資料類従・参考文献編5』(勉誠社、昭51・3)の解題(長尾高明氏執筆)に拠る。

(32) 注(29)論文。

(33) 『書札調法記』において世話字らしい世話字を「世話難字」と呼んでいたことが思い合わされる。

(34) 『字尽重宝記綱目』において〈無二差異一〉と〈無二差異一〉が重出する。前者は『字林拾葉』をとり込んだ本体部分にあり、後者は「世話字」を増補した部分にある。「書面走廻用字」に〈無二差異一〉が出るが、語の位置から見ても前者に拠ってとり込んだことが明らかなので、ここには加えなかった。

(35) 「書状遣字」に出る〈無二差異一〉は、語の位置から見て後者(世話字)に拠ってとり込まれたことが明らかなので、ここに加えた。

(36) この一文は、山田俊雄氏が注(29)論文に引用されている。